

二〇二一年七月二十四日(土) 金志玟

〔原文〕

萬二千物精神、共天地生、共一大道而出、有大有中有小、何謂也。乃謂萬二千物有大小、其道亦有大小也、各自生自容而行。故上道廣萬步爲法、次廣千步爲法、其次廣百步爲法、其次廣十步爲法、其次廣一步爲法。凡五道應五方、當共下生於地、共朝於天、共一道而行。是以大道廣萬步容、中道千步、小道百步、鼈道十步、毛道一步。物有大小、各自容往來。凡乃上受天之施、反下生施地。出當俱上朝天也。

〔訓讀〕

萬二千物の精神、天地と共に生じ、一大道を共にして出づるも、大有り中有り小有るは、何の謂ぞや。乃ち謂うところは、萬二千物に大小有り、其の道も亦た大小有るなれば、各おの自ずから生じ自ずから容りて行く、と。故に上道は廣さ萬歩を法と爲し、次は廣さ千歩を法と爲し、其の次は廣さ百歩を法と爲し、其の次は廣さ十歩を法と爲し、其の次は廣さ一步を法と爲す。凡そ五道は五方に應じ、當に共に下りて地に生じ、共に天に朝し、一道と共にして行くべし。是を以て大道廣さ萬歩を容れ、中道は千歩、小道は百歩、鼈道は十歩、毛道は一步なり。物に大小有り、各おの自から往來を容る。凡そ乃ち上に天の施を受け、反つて下は施すの地に生ず。出づれば當に俱に天に上朝すべきなり。

〔譯〕

萬二千の存在の精神は、天地とともに生成し、一の大道と共に生み出されたものであるが、大きいものがあれば、中なるものもあり、小さいものもあるのは、どうしてだろうか。萬二千の存在には大小があり、それぞれ歩む道にもまた大小があるから、それぞれ自然と生まれ、(相應する道に)自然と相容れながら生きていくのである。だから上等の道は、廣さ萬歩を基準とし、次は廣さ千歩を基準とし、その次は廣さ百歩を基準とし、その次は廣さ十歩を基準とし、その次は廣さ一步を基準とする。これら五つの道は五方に相應し、ともに下って地上に物を生みだし、ともに天上に朝謁し、一つの道とともに歩んでいくべきである。このゆえに大道が廣さ萬歩となれば、中道は千歩、小道は百歩、鼈道は十歩、毛道は一步の規模となる。物には大小があり、それぞれ自然と交流しあう。上方では天の生成のはたらきの恩恵を受け、下方では地の恩恵を受けて生成される。天下に生まれてきた物はすべて天を志向していくべきである。

〔注〕

○萬二千物『太平經』卷三十五分別貧富法「天以凡物悉生出爲富足。故上皇氣出、萬二千物具生出、名爲富足。中皇物小減、不能備足萬二千物、故爲小貧。下皇物復少於中皇、爲大貧」。「萬二千物俱出、地養之不中傷爲地富、……令小傷爲地小貧、大傷爲地大貧」。

○精神 『淮南子』精神訓「古未有天地之時、惟像無形、窈窈冥冥、芒芟漠閱、瀕濛鴻洞、莫知其門。有二神混生、經天營地、孔乎莫知其所終極、滔乎莫知其所止息。於是乃別爲陰陽、離爲八極、剛柔相成、萬物乃形、煩氣爲蟲、精氣爲人。是故精神、天之有也、而骨骸者、地之有也。精神入其門、而骨骸反其根、我尚何存。：精神盛而氣不散則理、理則均、均則通、通則神、神則以視無不見、以聽無不聞也、以爲無不成也。夫孔竅者、精神之戶牖也、而氣志者、五藏之使候也」。

『太平經鈔』卷八辛部「天地之間、凡事各自有精神」。『太平經』（太平御覽六六七）「真人云、人之精神、常居空閑之處、不居汗濁之間也。欲思還精、皆當齋戒香室中、百病自除。不齋戒、則精神不肯返人也。皆上天共訴人、所以人病積多、死者不絕」。『太平經』卷四十二「人有氣則有神、有神則有氣、神去則氣絕、氣亡則神去。故無神亦死、無氣亦死」。〔※『太平經』卷三十五「夫男者、乃天之精神也。女者、乃地之精神也」。『太平經』卷三十九「龍者、迺東方少陽、木之精神也」。『太平經』卷九十二「今日乃太陽、火之精神也。月乃太陰、水之精神也」。〕

○共天地生『太平經鈔』卷二乙部「元氣自然、共爲天地之性也。……太陰、太陽、中和三氣共爲理、更相感動、人爲樞機、故當深知之。……元氣有三名、太陽・太陰・中和。形體有三名、天・地・人」。

○大道 『太平經』卷四十七「大道者、得居神靈之傳舍室宅也」。『太平經』卷四十九「天自名爲大道、地自名爲德。所以然者、夫天地乃萬物之父母、凡事君長」。

○自生自容 『太平經』卷四十八「有陰無陽、亦不能獨生、治亦絕滅。有陰有陽而無和、不能傳其類、亦絕滅。故有天而無地、凡物無於止。有地而無天、凡物無於生。有天地相連而無和、物無於相容自養也。故男不能獨生、女不能獨養、男女無可生子、以何而成一家、而名爲父與母乎。故天法皆使三合迺成」。

○中道・小道 『太平經鈔』卷八辛部「小合小道者致小神、合於中道者致中神、合於大道者致大神。大神至乃得度世長存」。

○禳道 『太平經』以外に用例なし。

○毛道 東晉・佛馱跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷三十五「無量諸境界、悉從心緣起、一切諸法界、皆入一毛道」。

○自容往來 『太平經鈔』卷五戊部「天者好生道、故爲天經。積德者地經、地者好養、故爲地經。積和而好施者爲人經、和氣者相通往來、人有財相通、施及往來、故和爲人經也」。

○上受天之施、反下生施地 『太平經』卷四十「今地當虛空、謹受天之施」。

『太平經』卷三十五「夫天不雨、即其貞不施也。夫地不生萬物、即其貞不化也」。

『太平經』（要修科儀戒律鈔卷十四）「元氣、陽也、主生。自然而化、陰也、主養凡物。天陽主生也、地陰主養也。……天下凡事、皆一陰一陽、乃能相生、乃能相養。一陽不施生、一陰竝虛空、無可養也。一陰不受化、一陽無可施生統也」。

○出當俱上朝天 『太平經』卷三十六「夫人死、魂神以歸天、骨肉以付地腐塗」。

『太平經』卷一一六「天之授性、各自有精神。樂善、善精神至。樂惡、惡精神至。此自然之性也……真人欲知其大效、此比若天道也。諸清淨者樂歸天、諸沈重者樂歸地」。

### 〔原文〕

故大道但可張、不可妄翕也。翕之輒不相容、有不得生者、或有傷死。不得生出者、令人絕無後代。傷者傷人、死者殺人。古者聖人不敢廢絕大道者、睹天禁明也。子以何天道得傷。道者、天也、陽也、主生。德者、地也、陰也、主養。萬物多不能生、即知天道傷矣。其有不生者、即知天克有絕者矣。一物不生、一統絕、多則多絕、少則少絕。隨物多少、以知天統傷。夫道興者、主生、萬物悉生、德興者、主養、萬物人民悉養、無冤結。

### 〔訓讀〕

故に大道は但だ張る可きのみにして、妄りに翕ちひむ可からざるなり。これを翕めば輒ち相い容れず、生を得ざる者有り、或は傷死するもの有り。生れ出づるを得ざる者は、人をして絶え後代無からしむ。傷とは、人を傷つくこと、死とは、人を殺すことなり。古者、聖人 敢えて大道を廢絶せざる者は、天禁明らかなるを睹ればなり。子、何を以てか天道 傷つくを得んや。道とは、天なり、陽なり、生ずるを主る。徳とは、地なり、陰なり、養うを主る。萬物多く生ずる能わざれば、即ち天道傷くを知る。其の生ぜざる者有れば、即ち天克く絶つこと有るを知る。一物生ぜざれば、一統絶え、多ければ則ち多く絶え、少ければ則ち少く絶ゆ。物の多少に隨い、以て天統の傷つくを知る。夫れ道興かなれば、生ずるを主り、萬物悉く生じ、徳興かなれば、養うを主り、萬物人民悉く養われ、冤結無し。

### 〔譯〕

なので、大道はただ（生成のはたらきを）擴張していくべきであって、みだりに縮小してはいけない。生成のはたらきを縮めると、萬物は相い容れず、生まれ得ないこともあり、傷つくことや、死ぬこともある。「生まれ得ない」とは、人類が絶え、後代がなくなることをいい、「傷つくこと」は、人々を傷けること、「死ぬこと」は、人々を殺すことをいう。古代の聖人が大道を廢絶させようとしなかったのは、天の禁令が明らかかなことを目睹したからだ。そなたは何故、天道がものを傷けることができるというのか。道とは、天であり、陽であり、生成のはたらきをつかさどる。徳とは、地であり、陰であり、養育のはたらきをつかさどる。萬物が多く生まれ出ないことをみれば、天道が（物を）傷つけることがあることがわかるであろう。生まれ得ないものがあることをみれば、天が（ある種の生き物を）絶滅させることがあることがわかるであろう。（ある種のものが）一つも生まれなければ、（その種）すべてが途絶えてしまう。そのようなことが多ければ、多くの物が途絶え、少なければ、少ない物が途絶えるのだ。物の多少にしたがって、天道の死傷の法則を理解することができる。おおよそ道が盛んなれば、（天は）生成にはたらきかけ、萬物はことごとく生成され、徳が盛んなれば、（地は）養育にはたらきかけ、萬物と人民はことごとく養われ、怨みが結ばれることはないのである。

〔注〕

○大道但可張、不可妄翕 『太平經』卷九十二「德優者張地萬二千里」。『太平經鈔』卷九千部「道乃主生、道絶萬物不生、萬物不生則無世類、無可相傳、萬物不相生相傳則敗矣」。『周易』繫辭上「夫乾、其靜也專、其動也直、是以大生焉。夫坤、其靜也翕、其動也闢、是以廣生焉」。韓康伯注「翕、歛也。止則翕歛其氣、動則闢開以生物也」。

○傷死 『太平經鈔』卷七「萬二千物、不樂爭分、多傷死、其歲大凶」。

○人絶無後代 『太平經』卷三十五「夫男者迺承天統、女者承地統。今迺斷絶地統、令使不得復相傳生、其後多出絶滅、無後世、其罪何重也。此皆當相生傳類、今乃絶地統、滅人類、故天久久絶其世類也」。「夫貞男乃不施、貞女乃不化也。陰陽不交、乃出絶滅、無世類也。二人共斷天地之統、貪小虚偽之名、反無後世、失其實核、此天下之大害也。」

○傷者傷人／死者殺人 『太平經』卷三十五「武者以刑殺傷服人、盜賊亦以刑殺傷服人」。

○古者聖人 『太平經』卷四十九「故古者聖賢、與天同心、與地合意、共長生養萬二千物、常以道德仁意傳之、萬物可興也」。

○天禁 『太平經』卷六十七「古者賢聖、迺教而不止者、迺睹天禁明、各爲身計也……是故古者聖賢上士皆悉學、晝夜力學而不止者、亦睹見天地教令明也」。

『太平經鈔』卷九「常順天所爲者、長與天厚。輕逆之者、長與天爲怨。故古聖王之理者、一曰常生、二曰常養、三曰常施。……四曰刑之而不理、五曰殺、是其極也。以此分別、第一之君純生、第二之君純養、第三之君純施、第四之君純刑、第五之君純殺。生者延年國昌、養者增算、施者無過、刑者有病、殺者暴窮。古者聖王、睹天禁明、不敢妄爲也」。

○道·天·陽·生／德·地·陰·養 『太平經』卷四十五「夫天地中和凡三氣、內相與共爲一家、反共治生、共養萬物。天者主生、稱父。地者主養、稱母。人者主治理之、稱子」。「天者養人命、地者養人形」。『太平經』卷六十五「故上古時人、深知天尊道、用道、興行道、時道王。中古廢不行、即道休囚、不見貴也。中古、興用德、則德王。下古廢至德、即德復休囚也。故人興用文則文王、興用武則武王」。『太平經鈔』卷四「元氣、陽也、主生。自然而化、陰也、主養凡物。天陽、主生也、地陰、養也」。

○一物不生一統絕 『太平經鈔』卷四「陽氣一統絕滅不通、爲天大怨也。一陰不受化、不能生出、爲大咎。天怨者、陽不好施、無所生、反好殺傷其生也。地所咎、在陰不好受化、而無所出養長、而咎人、反傷其養長也」。『太平經』卷九十二「夫天地人三統、相須而立、相形而成。比若人有頭足腹身、一統凶滅、三統反俱毀敗」。

○天統 『史記』三王世家（莊青翟·張湯の奏文）「封建使守藩國、帝王所以扶德施化。陛下奉承天統、明開聖緒、尊賢顯功、興滅繼絕」。『後漢書』郎顛列傳「夫求賢者、上以承天、下以爲人。不用之、則逆天統、違人望。逆天統、則災眚降、違人望、則化不行」。『太平經』卷三十五「夫男者迺承天統、女者承地統」。

○道興者主生／德興者主養 『太平經』（要修科儀戒律鈔卷一）「修積真道。道者、天經也。天者好生、道亦好生、故爲天經。修積德者、地經也。地者好養、德亦好養、故爲地經」。（※卷六十五）『太平經鈔』卷二乙部「君宜守道、臣宜守德、道之與德、若衣之表裏」。

○冤結 『楚辭』九章·悲回風「悲回風之搖蕙兮、心冤結而內傷」。『太平經』卷三十五「或有妊之未生出、反就傷之者、其氣冤結上動天」。『太平經鈔』卷二乙部「夫壽命、天之重寶也。……欲知其寶、乃天地六合八遠萬物、都得無所冤結、悉大喜、乃得增壽也。」